

基調講演：牧野 篤（東京大学大学院教育学研究科教授）

「『ちいさなしあわせを重ねるふるさと』をつくる：労働者協同組合という担い手」

皆様こんにちは、牧野です。よろしくお願いします。今日は、「労働者協同組合周知フォーラム」、そして労働者協同組合法の施行からそろそろ 1 年を迎えるということで、お招きいただきましてありがとうございます。

私の専門は教育学で、その中でも社会教育・生涯学習が専門なのですが、最初にお声がけいただいたときに、ちょっとアウェー感がありまして、どうしようかなと思っておりました。

自分でも労働者協同組合について調べさせていただいて、アウェー感がある一方で、実はとても魅力的で、惹かれるものがあるな、と思い始めました。

今日、お持ちしたテーマが「『ちいさなしあわせを重ねるふるさと』をつくる」ということなのですが、私たちが社会教育や生涯学習を通して行っているまちづくりと、労働者協同組合という新しい働き方が、とても親和性があるのではないかと、そして、先ほど、京丹後市の中山市長もおっしゃいましたが、新しい社会を作っていく基盤になるのではないかと、そういう思いを強くしております。そのことを、これから、お話しさせていただければと思います。

最初にお伝えしたいことは、私たちがしていますのは、人と人との「かかわり」を作っていくことだということです。そして、労働者協同組合というのは、ある意味、「かかわり」を働き方にくみあげていく、そしてそれをさらに新しい生き方に練り上げていく、そういう可能性を持っていると思うのです。

昨今、大きな社会の課題として、Well-being（ウェルビーイング）がいわれますけれども、一般的には「よりよく生きる」と訳されます。本当は、being（ビーイング）というのは「そこにいる」というのがベースになりますが、もっと言うと、そのようにして「ある」という状態ではないか、さらには「よりよくある」というよりも「そのようにしてある」といったこと、それを受け止めあうこと、それはある意味パッシブ、受け身なのですが、受け身のただけけれども、そこに置かれてある、ということがベースになって、それが練り上げられて、「よりよく生きる」ということにつながっていく、このように考えられるのではないかと。

それを、全体としてウェルビーイングというということではないか。そうすると、労働者協同組合という働き方も、そうしたことに深くかかわっているのではないかと思います。

例えば、コロナが終わって新しい社会を作ろうという議論になってきているのですが、実はコロナ禍で、社会がいろいろなところで棄損をしてしまっている、傷んでいることが目に見えたのではないかな。

その一面で、私たちも既に気づいていますけれども、人本来のあり方も垣間見えるようになったのではないのでしょうか。例えば、コロナが始まった初期にマスクが足りなくなりました。この時に、子どもたちが日頃付き合いのある高齢の方々のことを思って、自分たちでマスクを縫って高齢者の施設などに配ったという事例があるのです。すると、今度は、施設の方々が地元の方々にお声がけをして、子どもたちの学校に1人2枚から3枚いきわたるように布マスクを縫って、贈りあった。こういう事例があったりします。

これは私たちがやっていた、いわゆるコミュニティスクールづくり、地域が学校と一緒にあって、地域と学校が子どもを育てましょうという、そういう仕組み作りがあるのですけれども、その取り組みで私たちが関わっていた子どもたちが、こういう行動をとったのです。

なぜ、そんなことをしたのか聞きましたら、「日ごろ仲良くしているおじいちゃんやおばあちゃんが困っているのではないかな、とふと思った。何かしたいと思ったけれども、どうしていいかわからなかった。たまたまテレビを見ていたら布マスクの作り方をやっていて、これだと思って、お母さんに相談したら、ミシンの使い方を教えてくれたので、練習したら、できるようになった。それで、友達に声をかけて一緒にやろう、となった。やっている過程で、おじいちゃんやおばあちゃんの顔が頭に浮かんで、とても嬉しかった」というのです。そして、やっぱり受け取ってもらえて、喜んでもらった。そうしたら、今度は高齢の方々もお返しに布マスクを縫って、子どもたちに送ったのですが、お年寄りたちも、マスクを縫っている最中に子どもの顔が浮かんでうれしかった、しかも、そういうことができる自分がうれしかった、というのです。

お互い相手のことを慮って嬉しくなる、こういう気持ちを持っているのです。これは岐阜県の事例なのですけれども、これを私たちの言葉で「恩送り」といったりします。恩返しではないのです。

見返りを期待せずに相手にとって良きことをしていくと、気がついて見ると、自分も良い状態になっているということが、連鎖していく。そうしたものが「恩送り」と呼ばれるのです。

難しい話になるかもしれませんが、これが、私たちが社会を作っている基盤なのです。

例えば、ルソーの「一般意思」という考え方があります。どういうことかという、誰もが相手のことを慮って、たとえば、憐みの情を持ったりする、それは抑えられない感情だ、ということです。たとえ、どんなに利己的な人であっても、目の前で子どもが飢えて死にそう、苦しんでいることを目の当たりにして、心を動かされないことがあるか、というと、少しは気になるのではないか。そんなことが私たちの社会の基盤だと言っているわけです。この社会の基盤とは、そういうことではないか。それは簡単に言えば、最近になって流行っていますが、Compassionate Community (コンパッション・コミュニティ) と相通ずるところがある。コンパッションというの共感するという意味なのですが、もともとは passion (パッション) というのは苦しみとか悲しみ、com (コン) は共有する。ですから、苦しみや悲しみを分け合う、分かち合う社会を作っていくと、みんなの悲しみが軽くなって行って、よりよい生き方ができるようになっていく。こういうことを言っているのですけれども、そういう社会の基盤が見えてきたのではないかと思います。

その反面で、私たちの社会な根源的危機の時代と言われる状況になってしまった。たとえば、コロナが終わって私が学生たちに「終わってどう？」と聞きますと、「ようやく令和の新しい時代になりましたね」というので、「君ら平成生まれだよ？ 平成時代ってすごい激動の時代だったんだけど、どんな感じがする？」っていうと、「平成時代という年号があったのは知っているんですけど、あったんですか？」っていうのです。

どういうことなのか聞くと、昭和がずっと蓋をしていて、だらだらと悪くなるような感じが続いていて、全然突き抜けた感がない。だけれども、コロナが終わったところで新しい生活や、新しい何かが見えてくる感じがする、と言うのです。

例えば、新しいビジョンが見えてきて、労働者協同組合もそうかもしれませんが、新しい働き方などが問われてくるようになった。ただ、その反面で、昨今の温暖化や気候変動のように、後戻りができないような厳しい状況になってしまっている。それを、根源的危機の時代と言ったりします。

コロナもそうなのですが、奇しくもというべきか、実は、過去、大きな社会変動があるときには、必ずと言っていいほど感染症の拡大があったって言われるのです。

たとえば、農業社会から工業社会への転換期にはペストが大流行しました。それから、軽工業社会から重化学工業社会への転換期にはスペイン風邪があり、今回、工業社会からいわゆる新しい社会に代わるときに、このコロナの大流行があった。これをどう見ていくか、が問われなければなりません。私たち自身が考えなくてはいけないのは、社会の変化はど

どんどん大きくなっていく、社会の構造はどんどん転換をしていく、予測がつかなくなってきている、ということはどうとらえるか、ということになってくるのだと思います。

今までは社会構造の変化というのは、一生に1回あるかないかであったのが、これから10年単位で起こるかもしれない、と言われ始めている。だからこそ、実は、予測不可能の時代に入ったという。私たちはこれを、日常生活の中で引き受けなくてはならない時代に入ってしまったのではないか。気候変動もパンデミックも、さらには働き方改革や産業構造の転換といったことをすべて含めて、私たちは日常生活の中でそれを引き受けなくてはならなくなってしまっている。

そのときに私たちが問わなくてはならないのが、足下をどう見つめていくのか、そういうことではないかと思います。私たちは今まで、私たちの先達や私たちの親たちがつくってきたいわゆる昭和の時代を生きてきました。そして、物質的に豊かな社会を作ってきました。その結果、人生100年を生きる時代になってきたわけですが、その後をどうするのかが見えてこない。その中で若者たちが、コロナが終わって、ようやく新しい社会になってきましたね、という事態になってしまっている。これをどうとらえるのかということが問われているのではないか。

そんな中で、これからは、「かかわり」というものがとても大事になるのではないかと思います。

たとえば、今、高齢社会ですので、あまりいい話ではありませんが、たくさんの高齢者の死亡に関する研究が出てきています。少し古い研究に10年間にわたって14,001名の方を追跡したものがああります。これは、何が高齢者の死亡率を下げることに関する研究です。

厚労省が高齢者の死亡率を下げる要因には運動と栄養と社会参加があると言ってきましたので、それをベースにして、運動と栄養と社会参加による習慣のない方たちの死亡率を100とすると、運動と栄養による習慣ある人の死亡率は3割下がり、さらに社会参加が加わると5割下がるという結果が出たという報告があります。

さらに、これに「運動の中の何が1番効いているのか」「栄養の中の何が」と見ていくと、こんなことが言われます。

1人で黙々とジョギングしている人よりも、2、3人仲の良い友達と笑いながらウォーキングをしている人の方が一般的には長生きである。

それから栄養の中の何品目とか注意をしている人の方が長生きだけれども、さらに、仲の

いい友達や家族・きょうだいと一緒にご飯を食べている方々の方が、長生きである。社会参加も、セミナーや講座に参加している人の方がそうでない人よりも長生きなのですが、仲のいい友達とカラオケに行ったり、サークル活動をしている人の方がさらに長生きである。

すべてにわたって、良好な人間関係のある人の方が、健康度が高いという結果が出たといえそうです。

さらに、ご飯の食べ方と死亡に関する研究があります。家族と同居して一緒にご飯を食べている方の死亡率を 1 とすると、死亡リスクが高まる方々がいる。誰かという、独居で 1 人でご飯を食べている人、それから家族と同居しているのですが 1 人でご飯を食べている人です。しかも、男女でリスクの差がある。

女性にはアスタリスクが付いていないのに対し、男性にアスタリスクがついている。ついているのは意味がある違いだということですので、男性で、家族と同居していて、1 人でご飯を食べている方の死亡率は約 1.5 倍になる。これは有意な差である。いかがでしょうか、男性で身につまされている方、いらっしゃらないでしょうか。

私たちはよく冗談で、「ご主人に早く逝ってほしい人は、ひとりでご飯を食べさせておけば勝手に早く逝ってくれるそうですよ」と奥様方に申し上げるのですが、「最近うちのかみさんやけに冷たいな、と思っている方はいませんか？」そういう、ちょっと嫌な研究があるのです。

それで、そうなったときに 1 人でご飯を食べて、やけくそになるのではなくて、男女ともに、1 人暮らしなのだけれども仲のいい友達とご飯を食べていると、死亡リスクが減るという結果も同時に出ています。それも含めて、いい人間関係の中でご飯を食べていると長生きになるということです。

さらに、こういうことも分かってきています。ボランティア活動が大学生のメンタルヘルスにとってもいい、さらには高齢者のボランティア活動参加はうつ病の罹患率を下げることも分かってきています。

また、国の経済産業研究所の研究でも、小学生のうちからボランティア活動の経験を積むと、利他性とか、互惠性を強めたり、自分の故郷を大事に思うようになるといったことも分かってきています。

人にとって、人との「かかわり」の中で育つことが、とても大事であることが言われ始めたりしています。

さらに、幸福感を決定する要因が大きく変わってきているとも言われます。どんなことかと言いますと、健康であることとよい人間関係があることが幸福感や生活満足度を高めることは変わらないのですが、第3位として、今までは年収、お金であったり、学歴であったりが大事だと言われてきていたのですね。

しかし、今、学歴は幸せ感とほとんど相関関係がないことが分かってきています。では、何が3番目に来ているかという「自己決定ができること」。たとえば、自分で働き方や生き方を決めることができるということ。しかも、良い人間関係の中で。これが1人1人の幸せ感を決める要因になってきたと言われていています。

私たちは、人は「かかわり」の存在だと言わなければいけないように思います。

そのことで、いくつか事例があるのですが今日は1つだけご紹介します。私たちがかかわっている農山村の事業についてお話をしたいと思います。今、いろいろな国の大きな事業で実は各省庁、私の関わっている文科省や農水省も含めて、コミュニティをターゲットにするような政策をどんどん打ってきています。

ここでご紹介したいのは、もう10年以上かかわっているのですが、愛知県豊田市の中間山村で進めている過疎高齢化地域の活性化事業です。かんたんに端折って話をしますと、人が減っていく中でどうしようかという相談があって、そこで現地で私たちは1年間かけて泊まり込みで、現地の方々の話を聞きました。

その中で分かってきたのは、実は、中間山村の人口減少や過疎化、少子化は、今起こっている問題ではなくて、私が子どものころ、高度経済成長のころに起こっている問題だということなのです。そのころに、今、地元を支えている高齢者の方々が、親から言われた言葉があるのです。

「博打をとるか、麻薬をとるか」、これがその言葉です。博打というのは、不安定な農林業を継ぐのか、麻薬というのは、サラリーマンになって毎月月給をもらえる生活をするのか、ということです。サラリーマンになると、毎月決まった給与が得られて、ローンを組んで家電品や車を買えたり、いろいろなことができるけれども、麻薬をくらのように足抜けできなくなる。そういう生活のどちらを選ぶのかということなのです。当時、親からは麻薬をとれとしか言えないと言われて、地元を捨てているということから始まるような、農山村のあり方だったのです。

そういうちょっと打ちひしがれた地元の状態の中で始まったのが、この事業です。選ばれ

たモデル地域は、全30戸、人口40人、1番若い人は42歳で、高齢者率5割を超えた限界集落でした。そこに10名の若者を全国公募して、住まわせて、農山村の振興事業にあたらせた。簡単に言えばそんな話です。

ただ、取り組み方がちょっと変わっていたのです。就農事業ではなくて新しいライフスタイルを作る文化事業として行いました。ハローワークを使って10名を募集しましたが、50名がすぐに集まってくれて、それを地元の方々に選んでいただいて、地元の方が面倒を見る形で定着をさせたという形になります。当然私も関わり続けましたし、私の教え子たちも、団塊ジュニアで就職氷河期にあたってしまって就職できなかったものですから、彼らが農業ベンチャーを作って持っていたので、彼らにもかかわってもらいました。

そして、結果的には、今まだ続いていまして、最初の10名が60名になり、子どもが40数名生まれて、モデル集落は人口が100人を超えて、高齢化率が3割台にまで落ちてきています。年収も1人当たり300万円から400万円になり、一家で約1,000万円になるくらいの収入になるような生活を、今、しています。

どんなことかという、写真をご覧ください。これは「ご縁市」という取り組みで、最初は農作物を市民に売ったりしていたのですが、だんだんつまらなくなってしまうと、いまやコンサートを開いたり、いろいろな文化的な事業に変わってきています。

これは休耕田を開墾して都市民に貸し出す事業です。よくあるのは田植えと稲刈りに来てもらうということですが、ここでは苗代作りから最後に刈り取って、ハサカケ、天日干しにして脱穀するところまで全部やってもらいます。夏の暑い中でも、草取りまでやってもらうんですが、かえって人気が出て土地が足りなくなってきました。大豆で同じことをやっています。

2年目になると結婚する者も出始めて、メンバー同士の結婚式や地元の人とメンバーの結婚もありました。そして、3年目には子どもが生まれ、地元では、25年ぶりに生まれた子どもでした。やはり子どもが生まれると、地元ではすごい力になるのですね。彼らに言わせると、隣のおばあちゃんが勝手に半年間くらい、家にあがりこんで、抱いていたと言っていましたけど、そのようなことも起こるようになってきています。

そして、今や、間伐材はずっと切りっぱなしになっていたのですが、それを小さく切って、山から下ろして薪にして販売したり、夏休みに子どもたちを受け入れてサマーキャンプをやってみたり、さらには、海外から学生を受け入れてワールドキャンパスをやってみたり、いろいろなことを行っています。

労働者協同組合にも言えるのですけども、全員移住者なのですが、彼らが都市部で学んできたことをベースにしつつ、地元の高齢者に教わった手習い、手仕事とか文化を混ぜ合わせて新しい事業を皆で検討して、グループで事業化して行って、事業が回り始めてお金が動き始めたら、地元の人に渡してやってもらうという関係で動いています。

例えば、若い女性たちが集まってできた雑誌の発行や、歌手が気がいたら一緒にやってくれていて、それが合唱団になって、あちこちに歌いに行ってくれたりですとか、そんなことが起こっています。

子どもたちが生まれてきて、子どもがどんどん増えてたりしています。

消防団も復活して、そして新聞配達も任されて、36名のスタッフで配ったりしています。さらに、ここでも、女性たちが完全オーガニックの小麦粉を使ってクッキーを作って売っている。これがすごく人気になって、名古屋市から1時間かけて買いに来る方もいらっしゃいます。

デザイナーも気が付いたら住んでいて、Tシャツに絵をかいて売ったら売れたということで、収益の半分をむらに入れてくれています。

これは、地元の男性と移住者の女性が結婚して、やってくれている民宿になります。私もここに泊めてもらったりしています。

また、彼らはこういう一軒家を借りて住んでいます。こういう空き家を、地元が提供してくれるのです。

さらに学校が廃校になった後でしたので、跡地利用で、中をきれいに改築改装して、5年前にお披露目をやりました。皆さん手弁当できれいにされていて、そのあと地元の方々に活用してもらうように動いていたのですが、みんなで事業を考えたために事業体がたくさんできてきたので、事業体の本部がここに置かれるようになって、ここが地元の経済の中心になってきています。

これらの活動の結果、子どもの数はV字回復で、廃校当時12名だったのですけれども、来年再来年くらいに地区全体で120名くらいになるということで、学校は廃校になった後なので復興できないものですから、新たな教育の在り方を考えています。たとえば子どもたちが学校から帰ってきてからここに通って、名古屋大学の研究者にかかわってもらってプログラミングやAI環境の教育を受けていて、今、海外と子どもたちが英語でやりとりができるようにするなど、最先端の教育を受けられるようにしています。

さらに、今、動いているのが、新たなケアのむらづくりです。たとえば高齢者が私たちが事業を始めてから 10 年たった頃、認知症など患ったり、体調を崩したりしはじめています。従来であれば、都市にいる子どものところに引き取られていったのですけれども、やはり皆さん、「いや」だとおっしゃる。「ここに住み続けたい」、「自分の子どもや孫よりもかわいい子がいるのに、なぜ、出なければいけないのか」とおっしゃる。

それで、どうしようかというときに、移住者の彼らが考えたのは、通所デイを作ろうということでした。「あんじゃない」(=心配ない)という施設です。空き家を買って、たまたまこの地域の出身の介護士がいたので交渉して帰ってきてもらい、今ではここが拠点になって、集落全体をグループホームのようにして使うという形で通所デイが動いています。

さらに、新しい試みとして、シェアリングエコノミーの試みがあって、空き家を買って、そこをシェアハウスにしたり、廃校跡地をシェアオフィスにしたり、電気自動車でカーシェアを試してみたりとか、いろいろな活動が展開してきています。

その中で、仕事を分け合っていく、みんなで考えて、みんなで事業を作って、みんなでもらう関係を作っていく中で、もしかしたら、この地域が日本の最先端になっていくような動きを示しています。

ここからスピニングアウトしたものとして、「自給家族」という取り組みがあります。もう子どもがいなくなってしまう集落では、人口もどんどん減っていきます。これをどうしようかというときに、彼らが考え出したのが、この自給家族というやり方なのですが、簡単に言えば、お米一俵 60 kg を 30,000 円で都市部の人に買ってもらうというものです。それだけなら産直運動のようなものです。

何が違うかといいますと、都市にいる自給家族になった子どもたちが、自分の田舎の両親に一俵 30,000 円で仕送りをしている、そして食べる分だけ毎月送ってきてくれていて、そして、家族なんだから、一緒に食べたいときは一緒に食べるからおいでよ、と呼んでもらえる。夏休みに子どもを送ってきたければ、一緒に生活するから送ってきなさいよ、農業体験がしたいなら体験できるから遊びに来てね、という関係になっていく。こういうことです。

そんな中で何が起こるかというところ、「かわり」を通じて農家が維持されていくと、農地が維持されて行って、農地が維持されていくと農地をベースにした自然の代謝が維持されていきますから、環境も維持される。都市にいる私たちも、あなたたちも、実は、農山村

の環境維持の当事者なんですよ、一緒になって自然を守っているのですよ、という関係になっているのです。

今、100 家族が参加されていて、集落の維持ができています。このような取り組みが可能になってきています。「かかわり」をベースにして、物質代謝を豊かにして行って自然環境を守っていくという取り組みを担っている。これも、彼らが話し合いながら形にしていった事業です。

こういう取り組みは、いいかえれば、「楽しさ」に駆動されるような社会のあり方ではないでしょうか。これは単にレクリエーションで楽しいというだけではなくて、むしろ生活をしているだけで楽しくてワクワクしてしまうような感じ、これを私たちは小さな社会づくりと言ったりしていますが、簡単に言えば、あいまいで緩やかな関係の中で、お互いに慮る、配慮をしあう、相手にとって良かれと思ったことをやっている、実は自分もうれしくなっちゃう、そんなことになっているのではないか。

例えば OECD は、学校教育を AAR 循環でとらえようとしています。

プランを立てるだけではなくて、なにかよさそうなことが起こると思って、ワクワクしちゃう、そうすると体が動いて行って次にアクションが起こって行って、アクションをしながら反省が起こるので、AAR(Anticipation-Action-Reflection)の循環が起こる、と OECD はいうのです。私たちは、これを組み替えて使っているのですが、本来は、反省をして、評価をして、ではなくて、むしろ、楽しそうなことや良きことを考えてワクワクすると、自然と身体が動いてアクションになり、そのときすでに振り返りが起こっている。うまくいっていれば悪乗りして、もっとやっちゃいますし、うまくいかなければちょっとやり方を変えればいいかなと、深刻にならないで、次に行きましょうというやり方につながっているのですね。そのような形で、次へ、次へと行けばいいという状態が生まれてくる。

これはいわゆる PDCA とはまったく逆の考え方なのです。PDCA がうまく機能するところもあるのですが、あらゆるものを PDCA で評価をかけてやることになってしまうと、当然マイナス評価になってしまうと次のプランが小さなものになったり、違うものになったりしてしまいますから、続かなくなってしまう。むしろ AAR で次へ次へという、ある意味駆動力をもつような形で動いていくと、地域やまちは変わっていくのではないのでしょうか。

私たちは、これを「学び」と呼んでいます。簡単に言えば、開放系で次へ次へどんどん駆動力が生まれてくる。自分が変わればみんなが変わっていくし、そんな関係の中で新しいものが生まれていくプロセス全体が「学び」だ、そういうふうに言おう、ということにな

っています。

そのように考えていくと、これからの社会の在り方としては、今までは行政が For All、税金を使って皆さん同じように条件を作りますよ、平等に参画できますよという条件を作ってきた。それは大事なことなのですけれども、さらにそこから By All に組み替えていく。つまり、誰もが主役としてかかわっていけるのだ、という関係を作っていくことが大事ではないかと思います。

たとえば、このコロナ禍の中で何が起きているかという、各地で自治会や町内会の担い手不足が露呈したのですが、子どもたちが自治会の役員や会長を務める例が出始めています。日本で、私が知っているだけでも 10 数名の中学生が、自治会の会長や役員をやったりしています。このスライドの事例の子は横浜のマンションの自治会役員ですが、この子が役員をやるようになってから、中高生がさらに 3 人役員をやり始めたと聞いています。そういう時代に入っているのですね。

子どもたち自身が「よきこと」に気付いている、皆にとって「よきこと」を実践していくと、自分にとっても気持ちがいいことになるし、いつの間にか自分にとってもうれしいのだという感覚をつかみ始めている。そんなことがこの社会に起こってきているのではないか。それは、社会に「共通善」を実装する営みだといっていいのではないか、と思います。

言い方を変えると、全員が当事者になっていくということではないでしょうか。それは、簡単に言えば、相手のことを尊重するし、相手のことを想像する、そして、お互いが想像しあうことによって、信頼を作り出していく、ということです。これからは、そんなことが大事になっていく社会に入るのではないか。

それを私たちの言葉で、「はまる」と言いますが、例えば経営学で有名なマズローの法則というのがあります。

簡単に言えば、物質的な生活が豊かになっていくと、欲求が高次化していったって、だんだん精神的なものに変わっていったって、最後は自己実現するのが最高の価値である、という言い方をすることがあります。個人を 1 つの個体として考えたらそうかもしれませんが、むしろ私たちは人間関係の中で生きていますから、人間関係の中でうまくいい場所が与えられると、むしろ周りから自分の力が引き出されていくのではないのでしょうか。私たち自身、様々なまちづくり実践をしていくと、そのことを感じることもあるのです。

その意味では、ジグソーパズルモデルと言ったりしますけれども、マズローの法則のよう

に豊かになることで高次化していくということもあるかもしれませんが、むしろそれぞれの方がそれぞれの場所でうまく役割を果たせる場所にうまくポコっとはまる、はめられていくと、周りから自分の力が引き出されて、自分も周りも変わっていく。こういうことに驚きながら、それがあ意味で嬉しくなる、という関係があるのではないかということなのです。

その意味では、人との「あいだ」ができてくる。「はざま」が「あいだ」に切り替わって行って、自分がその「あいだ」にいることによって、自分が新しくなっていくし、社会や関係も変わっていく、新しくなっていく。そのうれしさ、面白さを体感できるような関係が出来上がっていくように思えます。

「はまる」というのは皆に巻き込まれながら、自分がだれかを巻き込みながら、それぞれがウェルビーイングの主体になっていくということなのではないか。そう考えていくと、「ふるさとを作る」と言いましたけれども、ふるさととは外形的なもの、たとえば歴史、文化、物産であったり、偉人であったり、これらも大事ではありますがけれども、むしろ、それを自分事としてとらえられるような関係性というものこそが大事なのではないのでしょうか。

そうであれば人との「あいだ」が自分のふるさと、居場所になっていく。その意味では、人というものがふるさとになっていくということです。自分がAARの中に入り込んでいきながら、お互いに影響を与え合いながら、自分も変わっていくし、社会や環境も変わっていく。代謝関係が起こるようになっていく、ということではないでしょうか。

そんなものが、労働者協同組合がこれから活躍していくときの基盤になるように思えてならないということなのです。

これは言い方を変えれば、「恩送り」です。それが、労働者協同組合が事業を進めていく基盤になっていくということかもしれません。

人生 100 年の時代に入りました。大人も子どもも学び続ける社会、学びなおしが必要と言われるわけですが、学びなおしとは一体何か、簡単に言えば、お互いに「良きこと」に気づきあいながら、それを送りあっていくような関係を作っていく、関わり合いが公共財になっていくような社会の作り方になっていく。そういうことではないでしょうか。

そうすると、ふるさとというものが人というものによって変わっていくのではないか。そんなものを作っていく、送りあっていくような基盤として、そして、みんなが、自分でやっていく、By All だよ、高齢の方も現役の方も子どもも含めて By All になって自分が主役とし

てやっていけるような社会の条件ができてきているのではないか、それを促していくために労働者協同組合という組織のあり方があるのではないかと思います。

言い方を変えれば、それぞれの方々が自己決定しながら、お互いに、新しい社会を作っていくための地下水脈として、労働者協同組合があるのではないかと受け止めています。

その意味で、私たちも社会教育や生涯教育といった形でまちづくりをやってきましたけれども、ぜひとも皆さんの実践に学びたいと思いますし、また、できれば、どこかでご一緒できれば、社会づくりにともに貢献できると思っています。ぜひともご活躍をお願いしたいと思いますし、よろしければかかわっていただきたいと思っています。

どうもありがとうございました。